

【技能検定活用事例③】

東京・大森学園高等学校

■学校概要

所在地：東京都大田区大森西3-2-12

昭和14年創立／普通科（男女共学）、工業科（男子／情報技術コース、機械技術コース、電気技術コース）

生徒数約800名（普通科620名・工業科180名）

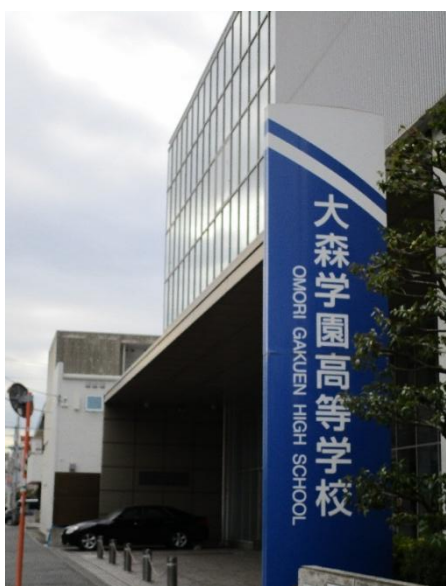
／工業科の進路状況（就職4割、進学6割）

公式HP <https://www.omori-gakuen.ed.jp/>

地域産業を支える即戦力育成を目標に 技能検定が拓く、ものづくりの力

技能検定を活用されている学校・企業の技能検定の取り組み状況取材。第3回は地域の町工場とともに歩んできた伝統校・大森学園高等学校。「社会に貢献できる有為なる人材を育成する」という建学精神のもと、さまざまな教育プログラム開発に意欲的に取り組んでいます。工業科長 百瀬浩一先生、工業科 齋藤正英先生、機械技術コースの生徒にお話をうかがいました。

——学校の概要、特色をお願いいたします



齋藤先生 私どもの高校がある東京・大森は、戦前から小さな機械工場が立ち並ぶ地域です。そうした地域の中小機械工場が協力し合い、次世代の人材を育てようということで昭和14年、大森機械工業徒弟学校を創立しました。それが本校の始まりです。

その後、機械・電気・情報の各技術科を設置する大森工業高等学校として発展し、平成17年、普通科を設置したタイミングで大森学園高等学校と改めました。

工業科では、1年次に各分野の基礎を学び、2年次からコースに分かれます。情報技術コースは「ITパスポート」などITのスペシャリスト育成を目指す

すコースで、電気技術コースは国家資格の「第二種電気工事士」取得が大きな目標になっています。ですから、技能検定と特に関わりが深いのは主に機械技術コースとなります。「普通旋盤作業3級」を一つの目標としています。

——技能検定を活用するに至った経緯を教えてください

齋藤先生 本校で技能検定の導入を検討し始めたのは平成16年頃です。「高校生ものづくりコンテスト」などに出場する生徒が増えてきた時期でした。まずは教える側が試験内容を理解する必要があると考え、教師全員が技能検定を受検し、その翌年から生徒にも受検を勧めるようになりました。

——技能検定を受検しているのはどのような生徒ですか

齋藤先生 工業科機械技術コースの生徒です。「普通旋盤作業3級」を毎年5人ほどが受検しています。過去には十数人が受検していた年もありますが、令和7年度は5人が受検申請しました。ただ、先に実施された学科試験の自己採点結果が思わしくなかった生徒が実技試験を辞退したため、学科と実技の両方を受検したのは4人でした。

実習で旋盤を経験してから受検する形になるため、多くの生徒は3年で受検しています。まだ旋盤を触ったことのない段階で、受検希望者を募ってもあまり意味がないと思っています。

高校3年間でさまざまな機械技術を体験してほしいという思いがあります。その中で溶接に興味を持つ生徒もいれば、フライス盤や旋盤に魅力を感じる生徒もいます。興味を持った分野の資格を目指せばよいわけで、「普通旋盤作業3級」の取得も高校3年次からでも十分間に合うと考えています。

——受検する生徒への指導はどのように行っていますか

齋藤先生 2年生の授業では、全員が旋盤の3級で使用する部品を用いた機械操作の基礎を学びます。そこで旋盤の基本を体感的に理解してもらいます。

そのうえで3年生になった段階で受検希望者を募り、希望者には4月から特別授業のカリキュラムを組みます。旋盤の実習授業では



受検生徒だけ別グループをつくり、技能検定の実技試験の練習ができるようにしています。ただし、授業時間には限りがあるため、十分な練習時間を確保するのは難しい面が

あります。そこで受検生徒を対象に補習を実施しています。毎年7月初旬の期末試験終了後から、本番までほぼ毎日練習を行います。最初は標準時間の2時間以内に完成させることを目標とし、その後は精度を高める訓練へと段階的に進めていきます。試験直前の5日間は、本番を想定した模擬試験を実施しています。

なお、学科試験に関しては、過去問題を用意し、試験1週間前ぐらいから生徒自身が集中して学習できるようにしています。

——高校生が技能検定を受けるメリットは何でしょうか

齋藤先生 1度でも合格を手にした生徒は、それが大きな自信になります。

また、昨年は在校中に「普通旋盤作業3級」に合格したことをきっかけに、就職先で技能五輪全国大会に出場することになった卒業生が2人いました。高校時代に努力した経験が、社会に出てから新たなチャンスにつながったことを知り、とても嬉しく思いました。

——貴校のホームページに各種資格とジュニアマイスター顕彰の取得を目指すとありました。ジュニアマイスターに関してはどのように評価されていますか？

齋藤先生 ジュニアマイスターそのものを目標にしているわけではありません。工業科の生徒が資格取得を通して「こうしたら合格できた」という達成感を味わうことが大切だと考えています。成功体験を一つひとつ積み重ねながら、いろいろなことにチャレンジしてほしい。その積み重ねが、結果としてジュニアマイスターにつながっていくと思います。

今は資格の時代だと思います。例えば建築の現場では、足場を組むにも資格が必要で、持っていなければ作業ができません。だからこそ高校生のうちに、まずは何でもいいので一つ資格を取ってほしい。そこで得た成功体験が、次の資格への挑戦につながればと考えています。

——では、貴校としてはこうした資格取得を通してどんな人材を育成したいとお考えか最後に聞かせていただけますでしょうか。

百瀬先生 大田区という地域は冒頭でお話したように町工場が多く、産業が盛んです。そこに誕生した工業高校でもあるので、就職に際しても私どもの生徒たちには即戦力としての側面が非常に大きく期待されています。そのため、就職してから周囲に迷惑をかけないよう、あいさつがきちんとできること、そして自分の技術を相手に伝えられる力を身につけてほしいと考え、日々生徒たちを教育指導しています。

また、今後も専門知識と技能を身につけていることを保障する一つとして技能検定な

どの資格取得に積極的に取り組んでいきたいと思っています。

令和7年度にジュニアマイスターシルバーを取得したHさんにお話をうかがいました。

Hさん：取材当時、機械技術コース3年。令和8年4月から製造業に就職。

機械関連の仕事に就いている父から話を聞くうちに、自分でも機械を動かしてみたいと思うようになり、機械技術コースを選びました。就職・進学どちらを選択するにしても資格があると有利だと思い、工業科で取得できる資格はできるだけ挑戦しようと決めて、1年生の頃からいろいろ受検してきました。

その結果、「ガス溶接技能講習」「アーク溶接特別講習」「ボイラー取扱技能講習」「フォークリフト運転技能講習」「高所作業車特別講習」などの資格と、技能検定では「普通旋盤作業3級」に合格。気づいたら9つも資格を取得していて、ジュニアマイスターシルバーをいただくことができました。

正直、ジュニアマイスターは全く意識していませんでしたが、資格取得は回数を重ねるうちにどんどん楽しくなっていき、そのつど達成感を味わうこともできました。取得するまでは苦労もありましたが、合格したときには、それまでの勉強が無駄ではなかったと実感しました。

技能検定の実技試験に向けては、授業と補習で練習しました。補習は7月初旬の期末試験終了後から、試験日直前までほぼ毎日です。分からないところは先生がマンツーマンで教えてくれました。また、得意なところは同級生に教えたり、逆に分からないところは教えてもらったり。そうした教え合いもとても楽しかったです。

就職後も自分が持っている資格よりもワンランク上を目指そうかなと思っています。技能検定についてもチャンスがあれば挑戦しようと思います。

<まとめ～お話をうかがって～>

生徒の自主性を尊重しながら、自由にのびのびと資格試験へ挑戦できる環境を学校が整えておられることが印象的でした。技能検定に挑戦する生徒は、真面目で協調性が高く、学校行事でも積極的に活動する傾向にあるとのこと。ものづくりの技能を磨く過程で、コツコツと努力する姿勢や仲間と協力する力も育まれているのだと感じました。技能検定は技能の証であると同時に、人間性も育む場にもなっているようでした。

本記事に含まれる文章、画像及びその他のコンテンツに関する著作権は、中央職業能力開発協会に帰属します。無断での転載や加工及び配布はご遠慮ください。

※掲載内容は取材当時（令和8年2月）のものです。